

丸亀市立西幼稚園実践提案研究会 開催レポート

2019年7月17日（水）、2018年度「ソニー幼児教育支援プログラム」優秀園の丸亀市立西幼稚園主催による、「優秀園実践提案研究会」を開催しました。公立や私立の幼稚園・保育所・認定こども園、小学校など保育や学校教育関係者、約100名の参加がありました。講師の瀧川光治氏（大阪総合保育大学 教授）によるご講演、九郎座仁美氏（香川県教育委員会義務教育課主任指導主事）川崎幸代氏（丸亀市教育委員会学校教育課指導主事）からは協議会への指導助言をいただき、充実した研究会となりました。

以下に丸亀市立西幼稚園による開催レポートを掲載します。

研究会概要

1. 日時：2019年7月17日（水） 9：30～16：30
2. 会場：丸亀市立西幼稚園
3. 主題：「感じ 考え 伝え合う 子どもの育成」
～子どもの遊ぶ姿を読み取る中から「科学する心」の芽生えを考える～
4. プログラム
 - 1) 公開保育 9：30～11：05
 - 2) 開会式・実践発表 11：15～12：00
 - 3) 協議会（1） 13：00～14：15
 - 4) 講演 14：30～15：30
演題：「子どもの姿から『科学する心』の芽生えをどう読み取るか～探究心・協同性の視点から～」
講師：大阪総合保育大学児童保育学部 教授 瀧川光治 氏
 - 5) 協議会（2） 15：30～16：20
 - 6) 閉会式 16：20～16：30

公開保育

<3歳児>

色水や石鹸遊びでは、使いたい道具や素材を自分で選び、自分なりのやってみようことを繰り返し楽しんでいました。ザルに色水を入れるとなくなることに気づき「あれ？」と何度もやってみる姿や、ストローでブクブクと泡を作り、息をゆっくり入れたり勢いよく入れたり息の入れ方を変えてみる姿など、自分なりの不思議や驚き、気づきから面白さを感じて考えを巡らし、いろいろなやり方を試す姿が見られました。泥遊びは、最初は泥の上でジャンプしたり寝転んだりすることを楽しんでいました。シャワーの水を掛け合って遊ぶ姿などから、「もっと、全身で水の感触を味わいたい」という気持ちが膨らむ様子を感じられたため、保育者はビニールプールに水を貯め、ペットボトルやじょうろを近くに置くなど環境の再構成をした。新たな環境をすぐに遊びに取り入れた子どもたちは、頭からバケツの水をかぶるなどダイナミックな遊びを楽しんだ。また、ペットボトルに水を入れて押すとピューッと水が出るが水が減ってくると出てこないことを不思議に感じ試すなど、思い思いに水や泥との関わりを繰り返し、面白さを味わっていた。



<4歳児>

子どもたちは、砂場で桶をつなげて水を流したり、トンボやセミを捕まえようと追いかけたり、回転ずしごっこでレーンを作ったりなど、一人一人が自分の目当てをもって楽しんでいました。同じ場で同じ遊びを楽しんでいるようでも、一人一人その楽しみ方は違い、それぞれが自分の感じたままに環境と関わり、繰り返し

試したり考えたりしながら遊ぶ様子が見られた。時に、「あっ！面白い」「先生、今の見た？」「すごいでしょ」などという思いを言葉やアイコンタクトで保育者や友達に伝えようとする子どもの姿が見られた。保育者は一緒に驚いたり共感したりしながら、子どもの思いを受け止め遊びに夢中になる姿を支えた。子ども同士で友達の言葉や遊び方に刺激を受けたり、取り入れて試したりする場面ではさらに新たな気づきや面白さに出会い、遊びが広がったり深まったりしていた。



<5歳児>

砂場でウォーターライダー作り、保育室ではドールハウス作り、基地ごっこ、段ボールでの乗り物作りなど、気の合う仲間と互いに考えを出し合いながら遊ぶ姿が見られた。乗り物作りをする子どもたちは、3つの段ボールを連結して動かそうと話し合っていた。「前の人が引っ張ってくれたら進むよ」「え、重くて壊れるんじゃない？」「ちょっとやってみてよ」と相談しながら試してみると、壊れることなく進んだ。しかし、前の2個の段ボールに乗っている子どもが、「でも、やっぱり引っ張るのは重たい」「そこに乗っただけは重たいよ」と言い、「それじゃあ、前と同じように穴を開けたらええんや」と、互いに感じたり考えたりしたことを伝え合いながら遊ぶ姿があった。今までの経験から予想したことを、伝え合いながら実際にやってみる中で、遊びが広がったり、仲間の気持ちに触れて関係が深まったりしていた。



実践発表

本園では「科学する心」について、既存の概念を、遊びを通して気づかせることではなく、「子ども一人一人が心を動かし、自分なりに感じ、考え、仲間と伝え合う面白さを味わうその過程こそが大切にされなければならない」と考えている。その具体的事例として、3歳児では、「環境との関わりの中で心が動き、『楽しい』『面白い』『やってみたい』と何度も繰り返し試す姿」、4歳児では、「同じ空間で遊んでいるようでも一人一人遊び方が違っている、その思いを保育者と共有したり、時には友達と楽しさが重なったりする姿」、5歳児では、『『どうしてかな？』』と考えたり『『すごいよ。見て！』『いい考えがあるよ』』と伝え合いながら力を合わせる姿』などを紹介した。このような、「子どもたちが感じたままに環境に関わり、主体的に考えたり表現したりする」事例を通して、日頃から大切にしている保育の取り組みを発表した。

また、子どもや保育者の内面を丁寧に読み取る園内研修や「保育はチーム」をモットーに大切にしている職員間の連携についての実践、子ども一人一人の経験を支える「心が動く豊かな環境」「幼児理解に基づく援助」について、研究の過程で得られた学びと今後に向けての課題について提案した。

協議会（1）

公開保育について、以下の視点から振り返り、協議が進められた。

視点1・今日の保育について、どのような、感じ考え伝え合う姿が見られたか。

視点2・幼稚園教育要領等に示されている、育みたい3つの「資質・能力」からどのように見取れるか。

まず視点1について4~6人のグループで協議し、話し合ったことを発表し合い全体で共有した。さらに、保育場面を抽出し、そこで見られた子どもの姿について視点2から協議し、内面の理解を深めた。

[協議内容より抜粋]

○視点1について

- 異年齢で同じ場で遊ぶ（砂場・虫探し・色水など）中で、遊び、子ども同士、保育者が自然とつながり、言葉での伝え合いだけでなく、肌で感じる、真似る、見る、表情で伝え合うといった姿が多く見られた。



- 一人一人が自分なりの思いをもってじっくりと遊んでいる。何度も繰り返し試す姿、友達を真似たり同じ動きを楽しんだりする姿、安心して思うがままに遊ぶ姿があった。

○視点2について

☆砂場で樋を使って水などを流していた遊び（4歳児）について

- 乾いた砂・湿った砂といった、砂と水の関係性や水の力（水圧・水流）について自分なりに感じたり、気付いたりしている。砂の量や水の量、流し方を変えて試している姿からは思考力の育ちを感じた（**知識及び技能の基礎**）。
- いろいろな量や勢いで水を流すことで、何度も試せる環境、思いもよらない出来事に出合う環境となり面白さにつながっている（**思考力・判断力・表現力の基礎**）。
- 何度も何度も夢中になってやってみる姿は粘り強さにつながる。うまくいかないこともポジティブに捉え、遊びの面白さにつなげていっている。友達との関係性の中で自分の思いをもちながらも、友達と関わり合って遊ぶ楽しさを感じている（**学びに向かう力・人間性等**）。

●指導・助言

・ 九郎座仁美氏

子ども一人一人の内面に思いを寄せ、その思いを丁寧に肯定的に受け止める保育者の関わりや、子どもたちの姿を面白がり遊びを一緒に楽しむ保育者の存在が、子どもの目をキラキラ輝かせ伸び伸びと遊ぶ姿を支え、いろいろなことに楽しさを感じ興味を広げながら環境に関わろうとする姿につながっていく。

・ 川崎幸代氏

感じ考え伝え合うという視点で子どもの姿を見ていく時、伝えようとする姿を言葉だけではなく、表情、動きなどから感じ取っていくことが大切である。そして、表出している言葉や表情が本当の思いであろうかと内面にしっかり気持ちを寄せ、見取ろうとすることが必要だと思う。



記念講演・協議会（2）

瀧川光治氏／大阪総合保育大学 教授

当園の保育に対する指導講評を含めてご講演いただいた。

- 子どもたちにとってのやりたいことができる環境があり、砂場、色水、保育室内など随所に環境を通して行う幼稚園教育要領を基にした保育の営みが見られた。また、5領域のねらいや育てたい資質・能力とつないでいくことを大切にしている。チョウの飼育を通しての実践もあったが、このようなチョウの成長は小学校3年生で学習する内容であり、幼児期に基となる実体験をしているということがとても大切になってくる。小学校では、2008年の教育要領改訂の際『実感を伴った理解』というキーワードが出てきた。幼児期はまさに実感を伴った理解が大切な時期であり、ゆったりとした時間の中で自分の興味をもったことにじっくりと関われる幼児時期ならではの経験の積み重ねを大切にしてほしい。
- 「科学する心」の捉え方について、いろいろな視点から考えてみるとよいことを示唆いただいた。
 - ① 子どもの好奇心が現れ出る姿を捉える

好奇心は生後8～10か月で芽生えてくる。好奇心が現れる時には次のような特徴がある。

 - A じーっと見ている（あれ？なんでだろう？どうしてかな？）…好奇心の芽生え
 - B 繰り返している（こしてやってみたら？）…探求心の芽生え
 - C 喜んでいる（やった！そうか！）…そのことを楽しみ達成感・満足感を味わっている
 - ② 領域「環境」と「10の姿」（思考力の芽生え）の視点から捉える

「科学する心」を育むことは特別なことではなく、教育要領の領域「環境」に示されている内容で



あり、10の姿『自立心』『協同性』『思考力の芽生え』に示されている共通キーワードは『考えたり、工夫したり』であることから、いかに子ども自身が考えていく、その過程が大切かということが分かる。

③ 「幼児期に育みたい資質・能力」の視点で捉える

どんなことを感じたり気づいたりしたかといった「知識及び技能の基礎」、どんなことを考えたり試したり工夫したりしたかといった「思考力、判断力、表現力等の基礎」、もっとやってみたい、こうしたいといった「学びに向かう力、人間性等」の3つの資質・能力を実践的な子ども理解の視点として取り入れてくことで、具体的な育ちの姿や学びの連続性が読み取れる。

④ 子どもの姿から「科学する心」の芽生えを捉える

A 「最初の気付き」と「好奇心の芽生え」（じーっと見ている姿）

B 「対象と関わる」中で「試行錯誤」（繰り返している姿）

C 「気付きの再発見、新たな気付き」（喜んでそのことに取り組んでいる様子）

こういうことを繰り返す中で「資質・能力」さらに「問題解決力」や「創造的な思考力」が育ってくる。経験したことや気付いたことをさらに生かして展開していく力（＝「主体的に遊ぶ力（学ぶ力）」）を育てていくことが、これからの時代に求められている。

○ 「科学する心を育てる」ための保育者の援助について

- 子ども主体で、子どもの気付きや発見を促す関わりや援助が大切である。また、子どもへの言葉がけについては「楽しい」「もっとやりたい」を引き出したり、子どもの遊びが充実するように共感したり認めたり、子どもの気付きを一緒に喜んだり、また、子どもの遊び方が豊かになるような言葉がけが大切である。
- 子どもが主体的・自発的に環境に関わって遊びや活動が展開できるように、どんなきっかけやしかけを考えるのか、その工夫が重要である。どんな環境を用意するかによって、そこで体験できることや学ぶことは変わってくる。『環境を通して保育を行う』とは、園生活すべての環境のもつ意味を考えることが必要である。何度も繰り返すことができる、試したり工夫したりすることができる、試して気付く、やってみて気付くことが生まれる、可変性がありいろいろな遊び方や試し方ができるといった保育の展開と環境構成を大切にしたい。
- そこにある保育環境で「遊ぶ力」なのか、保育環境や遊び方等をアレンジしながら自分で「遊びを創り出す力」なのかなどという視点で遊びの質をしっかりと捉えることが重要である。

○ 協議会（2）では、公開保育や協議会（1）を振り返り、資質・能力の視点で読み取ったことや、講演を通して学んだこと、自園での保育にどう生かしていくかなどについて、5～7人のグループで互いに伝え合い、本研究会を通しての学びをさらに深める時間となった。

- 砂場でといに水を流していた場面では、船が流れに乗ってカーブしていくことを面白いと感じ、何度もやってみるうちに、偶然といがシーソーのようになり水が跳ね上がる様子を面白がり、またやってみるといった姿があった。子どもは自分でやってみて面白さを感じ、気付いたり考えたりする中で次への思いが生まれ、原動力につながっている。資質・能力の視点から読み取ると共に、10の姿からも読み取ってみることで深い読み取りができ、その子の育ちが見えてくる。
- 3つの資質・能力は絶えず絡み合っている。どんな風に絡み合っているのかということを読み取っていくことが大切である。
- 動画を視聴し、色付きの光る泥団子を作ろうと試行錯誤しながら取り組む子どもたちの姿について、失敗と思われることも、子どもたちにとっては前進する経験であり、友達と一緒に試行錯誤する、その過程が重要である。